Cut in slices と cut into slices の使用頻度に関する一考察

前置詞 in の与格用法と対格用法

藤原隆史

はじめに

英語には結果構文と呼ばれる構文があるが、状態変化動詞（resultative verb）が用いられる結果構文では、変化結果を表す結果句に前置詞 in 結果句と into 結果句がくることが知られている。本研究は、状態変化動詞 cut が用いられる結果構文に出現する in/into slices という結果句に注目し、Corpus of Historical American English（COHA）における各結果句の出現頻度を調査した。本研究では、その調査結果とその考察について述べる。

先行研究

英語の結果構文について、大谷（2019: 67）は[X V Y RP]- 'X causes Y to become Z'という定式化を行っており、結果述語（resultative predicates = RP）は、主語の行為によって目的語に生じた状態変化を表すと説明している。例えば、John broke the stick {in/into} pieces.（江口 2022: 35）では、John の行為（broke）によって the stick にもたらされた変化結果が in/into pieces で記述されている。江口（2022）による例文のように、into 結果句だけでなく in 結果句をとることのできる break のような動詞は状態変化動詞（resultative verb）と呼ばれ、影山（1996: 214）は、cut, break, crack, tear 等の動詞を挙げている。状態変化動詞は、その意味構造に目的語の状態変化が含意されているため、in 結果句の使用が認可されると考えられている（江口 2022）。一方で、John pounded the metal into/*in pieces.（並木 2013: 152）では、行為動詞 pound が用いられており、この場合は pound の意味構造に the metal の状態変化の意味が含意されず、状態変化の意味を担っているのは into 結果句であると考えることができる（江口 2022）。本研究が取り上げる cut についても同様で、その意味構造の中に目的語の状態変化（切れていない状態から切れている状態への変化）の意味が含まれるため、本来は動きの無い静的な位置関係を表す in も結果句として現れることが可能になっている。

前置詞 in のこのような用法は、古英語時代の対格をとる用法の名残であることが分かっている。Oxford English Dictionary（OED）によれば、in は元々与格をとって静的な位置関係を表す用法と対格をとって動的な位置変化を表す用法が使い分けられていたが、中英語期以降になって格変化が失われると、対格をとる用法が前置詞 into に担われるようになっていったという。ただし、現代英語において、元々 in が持っていた対格をとる用法も未だに混在しており、上記で見たような一部の用法がそれに該当すると考えられる。

本研究では、COHA を用いて、状態変化動詞 cut に後続する結果句に in slices と into slices をとるものを調査し、それぞれの出現頻度の通時的変遷を明らかにすることを目的とする。なお、本研究では、Fujiwara & Iijima（2023）が COHA に出現する cut in/into pieces を調査した際に用いたものと同様の統計手法を用いる。

分析方法

Fujiwara & Iijima（2023）では、cut in/into pieces に注目し、COHA の各年代における in/into pieces の出現頻度に統計的に有意な差があるかを検証している。その際に用いた分析方法と同様に、本研究においても、状態変化動詞 cut の後ろ 9 語以内に出現する slices を COHA の Collocates 検索で抽出し、さらに in/into と共起している用例を抜き出した。これにより、cut(s) in/into slices, cut(s) O in/into slices, cut(s) in/into slices O 等のコロケーションを抽出した。さらに、COHA がカバーする 1820 年から 2019 年を 40 年毎の時代に分割し、各年代における in/into slices の出現数をカウントした。40 年毎に区切った理由は、10, 20, 30 年だと細かすぎ、50 年以上だと大まかになりすぎるため、200 年をある程度細かく区切ることができ、且つ、割り切れる年代のまとまりとして 40 年毎のまとまりを採用した。その上で、出現頻度を各年代（1820-1859 年, 1860-1899 年, 1900-1939 年, 1940-1979 年, 1980-2019 年）×前置詞（in と into）のクロス集計表にまとめ、有意水準を 1%に設定したうえで独立性の検定を行った。なお、調整済み残差検定と効果量も算出している。

結果と考察

上記の分析から、以下の観察が得られた。観察 1：1980 年代以降に into の出現頻度が急激に高くなっている。観察 2：1980 年代以前は、多少のばらつきはあるが、相対的に大きな変化はない。

表 1　各年代における in/into 結果句の出現頻度

年代	in	into
1820-1859	9	12
1860-1899	13	12
1900-1939	12	19
1940-1979	5	9
1980-2019	7	182
合計	46	234

上記の観察が統計的に有意かどうかを確かめた結果、観察 1 に関しては統計的に有意（$\chi 2$ (4, N = 280) = 71.015, p = .00, Cramer's v = .504.）、観察 2 に関しては帰無仮説を棄却できず独立性がなく（$\chi 2$ (4, N = 91) = 1.363, p = .714, Cramer's v = .122.）頻度のばらつきは偶然によるものであることが分かった。観察 1 に関して、年代×前置詞のクロス集計表は表 2 の通りである。調整済み残差検定の結果を見ると、1820-1979 年における in の出現頻度は期待値を越えており、逆に同時期の into のそれは期待値を下回っており、1820-1979 年には in が有意に多く、また、into が有意に少なく出現していることが分かる。1980 年以降は、in の調整済み残差の値が有意に低くなり、into のそれが有意に高くなっている。このことから、1980 年代以降 into の頻度が急激に増え、in のそれを逆転していることが分かった。この通時的な変遷は、Fujiwara & Iijima（2023）が示した cut in/into pieces における in 結果句と into 結果句の変化と同様の傾向であり、cut に後続する in/into 結果句において in が into に置き換わるプロセスが進行している可能性が示唆された。

表 2　年代（1820-2019 年の 40 年毎）×前置詞（in/into）のクロス集計表

	前置詞							
	in			into			Total	
年代	N	%	Adjusted Residual	N	%	Adjusted Residual	N	%
1820-1859	9	0.20	3.40	12	0.05	-3.40	21	0.08
1860-1899	13	0.28	5.03	12	0.05	-5.03	25	0.09
1900-1939	12	0.26	3.55	19	0.08	-3.55	31	0.11
1940-1979	5	0.11	2.00	9	0.04	-2.00	14	0.05
1980-2019	7	0.15	-8.28	182	0.78	8.28	189	0.68
Total	46	1		234	1		280	1

結論

本研究では、状態変化動詞が用いられた結果構文の結果句に前置詞 in/into がくるものとして、cut in/into slices を取り上げ、COHA における 40 年毎の in/into slices の頻度を分析した。結果として、1980 年代を境に、into の使用頻度が急増し、in の使用頻度と逆転していることが分かった。一方で、1820-1979 年においては、in と into の使用頻度について統計的に有意な差は見られなかった。以上のことから、cut in/into slices における状態変化動詞 cut とそれに後続する in/into slices の出現頻度は、Fujiwara & Iijima（2023）が示した cut in/into pieces と同様の頻度における通時的な変化が見られる可能性があることが分かった。

参考文献

Davies, Mark. (2008-). Corpus of Historical American English (COHA), (https://www.english corpora.org/coha/. Retrieved on 2024.7.8). 江口巧 (2022). 「変化結果を表す in/into 前置詞句の交替について」『英文学研究支部統合号』14: 251-259. Fujiwara, T. & Iijima, H. (2023). Which Preposition Do You Prefer, Cut In or Cut Into?:A Corpus-Based Analysis of Cut In Versus Cut Into Constructions. *The Journal of Matsumoto University* 22: 159-168. 影山太郎 (1996). 『動詞意味論―言語と認知の接点―』東京：くろしお出版. 並木翔太郎 (2013). 「項構造基盤結果構文における in 結果句の生起について」『JESL』30: 152-158. 大谷直輝 (2019). 『ベーシック英語構文文法』東京：ひつじ書房. Oxford University Press. (2000-). The Oxford English Dictionary Online, https://www.oed.com/. (Retrieved on 2024.7.7).